

## 年頭のご挨拶

# 「ワレが笑顔で暮らす島」目指して

三宅村村長 櫻田昭正



櫻田昭正村長から、恒例となっている年頭のご挨拶をいただいた。村長は、今号で休刊となる本紙が、島の復興のために果たした役割を評価してくださるとともに、今後も「あなた（ワレ）が笑顔で暮らす島」を目指し一層の努力をしていく姿勢を表明した。

新年明けましておめでとうございます。よき新春をお迎えのことと心よりお慶び申し上げます。在京者の皆様におかれましては、2000年噴火による全島避難以降、ご苦労されながらも三宅島の復興復興に対し、温かいご支援・ご協力を賜り、衷心より御礼申し上げます。また、三宅島ふるさと

再生ネットワーク事務局の皆様におかれましては、各地で生活されている在京者の方々を様々な形で繋ぎ、支援してくださっていることに改めて敬意を表します。さて、三宅島新報が本号をもって、休刊になると伺い本当に残念でなりません。振り返りますと、06年1月1日発行の第1号から、様々な事情により帰島できずにいる島民同士のネットワークとして、また、島や行政の情報発信、島の復興復興支援など、多くの役割を担っていただきました。14年75号にわたる長き

# 三宅島新報

発行所：三宅島ふるさと  
再生ネットワーク  
〒173-0005  
東京都板橋区仲宿2-1  
TEL 090-4922-0798  
FAX 03-3964-4065  
発行人：会長 佐藤就之

## 事務局便り

今回の発行をもちまして三宅島新報を休刊いたします。新報の発行に携わらせていただいていたこと、今改めて感じていることは、三宅島内の現状を発信してくださる方々がいて、それらをまとめ編集するDTPAの皆さんがいて、さらに変わらず応援してくださる方々など、沢山の方のお力添えがあり、ここまで続けることが出来たということです。長年のご協力いただいた皆さまに感謝を申し上げます。事務局長 板倉美紀子

## 朗報の島 更なる発展に期待を

ふるさとネット会長 佐藤就之



在京者、島民、ご支援を頂いた皆さまに、新年のご挨拶を致します。

櫻田昭正村長は、就任から新年号に寄稿。「ワレが笑顔で暮らす島」の公約も浸透し、議会でも真摯に議論し施策をすすめています。三宅村議と村長選挙が2月4日告示、9日投票開票です。今後も「笑顔」の島づくりを期待しています。島も朗報が続きます。商工会特に女性部の活躍、農業振興会はリーダーに恵まれ、店舗移転は、島一番の働き者の坪田のおばちゃん達にとつ

て朗報。漁協も噴火前の5割程度の生産量ですが、継続者の育成や港湾整備などで期待できます。また、全島老人クラブ会も復活、交流・互助活動を行っています。さて、全島避難中、2002年4月の第4回三宅島島民ふれあい集会・三宅島島民連絡会発足式で会長に推挙されて以降、ネットを含め約20年間、微力ながら駆け抜けてきましたが、「三宅島新報」は今号で休刊とします。謹んで皆さまにご報告いたします。なお、「管内概要・令和元年版」紹介等はHPで継続します。ありがとうございました。

## 副会長紹介1 光安千久子さん

# 裏方からネット副会長へ

ふるさとネットの副会長兼三宅支部長を務める光安千久子さん。三宅島出身の光安さんは、ネット発足当時から裏方的な役割を担い、平成25年に乞われて現職に就任。幼いころに満州で苦勞をしてきた経験などを生かして、ふるさとネットの活動を支えてきた。

### 過酷な満州生活

三宅島ふるさと再生ネットワークの立ち上げ時からその支援を行い、昭和25年度から副会長を務める光安千久さんは、昭和9年に三宅島で生まれた。昭和15年赤場噴火で



支援者の新年会でフラダンスを披露する光安さん

## プロフィール

昭和9年三宅島の出身。満州や東京、九州等での生活を経て昭和59年年に島に戻り、2000年噴火に遭遇。ふるさとネットでは副会長兼三宅島支部長を務め、島での活動をまとめるとともに、神楽坂商店街の「あおぞら市」の物産店でも中心的な役割を果たしてきた。

関係を持つ中で、様々な

生活をしたが、それは厳しいものであった。その後、母と共に三宅島に戻った光安さん。小・中

学校に入学。開拓団にため1年下のクラスに編入された。中学のとき、内地に転出し同郷の同年配の知人とも同じ仕事場で働いたこともあった。また、働きたがら中学も卒業をすることも出来た。

その後、19歳のときに大病を患い手術等もしたが無事回復し、よき伴侶にめぐり合って結婚。24歳で子どもも授かった。当時夫は印刷屋勤務。光安さんが25歳のときに、夫はNHKに就職し神戸支局から始まり各地に転勤があつたが、持ち前の頑張りで社宅自治会役員もやり、友人もでき数年前は遠方より三宅島に合いにも来てくれた。光安さんが三宅島に戻ったのは昭和59年。島に土地があつたことか

### 活動のバックアップを

光安さんがふるさとネットの活動にかかわるようになったのは、佐藤会長と親戚関係があり、また中学校の同級生だったことなどによる。平成17年に帰島したのは、佐藤家は、佐藤家と日常的に

全壊被災したため同年、父は、八丈島の満州開拓団の呼びかけに同行し一家移住を決断した。幼かった光安さんは、敗戦前は、広大な大地で苦勞なく育つたが、敗戦後は過酷な状況に置かれた。夜は凍死する人びともいた。口には出せないほどの困難を乗り越え帰国した。

### 噴火は大きな衝撃

そして、様々な苦勞の後昭和21年に引き上げ。内地では知り合いを頼り生活をしたが、それは厳しいものであった。その後、母と共に三宅島に戻った光安さん。小・中

ら、夫の定年後は三宅島で暮らす計画をした。島では、和裁士の資格を生かし仕立てなどの仕事（現在でも着物注文受付中、神着お祭り浴衣特約）や畑仕事も勤しんだ。2000年噴火は光安さんにとって大きな衝撃であつたようで、「余震で眠れず、噴火後の避難の際は灰で息ができないほどだった」と話す。9月に避難したのちは、北区にある都営住宅で生活したが、10月には避難生活のストレスからか、狭心症を患い1カ月ほど入院してしまつた。

### 「ふれあい宝」に

光安さんは、このような裏方としてのサポートに徹するつもりでいたそうだが、10年に前副会長がご逝去されたことなどから乞われてふるさとネットの副会長兼三宅支部長という役職を務めるようになった。光安さんはこれまでの活動を振り返って、「いろいろなことがあつたことを、今でも懐かしく思います。様々な方とふれあえたのは、私にとって宝になっていきます」と語った。

## 副会長紹介2 酒井一豊さん

# これまでの活動 思い出に

住んでいる団地で行っているカラオケ会に参加者に三宅島名産の明日葉を配る酒井さん



ふるさとネット副会長の二人目は酒井一豊さん。全島避難後、佐藤会長とふるさとネットの立ち上げに尽力し、数々の活動に参加してきた。活動を通じて多くの人と出会え、それはこれからも思い出として残っていくと語る。

### 新たな生き方を島で

三宅島ふるさと再生ネットワークで長年副会長を務めてきた酒井一豊さんが島で暮らし始めたのは37歳の時だった。中学を出て秋田から上京、

大工の見習いから東京での生活を始めたが、東京での生活に見切りをつけて、1980年、新たな生き方を求めて三宅島に渡った。「こんな性格だから島の人ともすぐに仲良くな

## プロフィール

1943年秋田県出身。中学卒業後上京し、80年三宅島へ渡る。大工やJAでの勤務を経て2000年噴火に遭遇。避難先の東久留米で「三宅会」会長。現在はふるさとネット副会長として活動の傍ら、居住する団地の自治会長の事務、カラオケ会の世話役も行う。

れた」と笑顔で語る酒井さん。自身のサッパリとした性格から、島のボウリング場や呑み屋で島の人と交流を深めた。

### 島民の集いで会長と再会

のちにふるさとネット会長となる佐藤就之さんと出会ったのもこの時代。しかし呑み屋で会う以上の付き合いはなかった。

二人の関係を大きく変えたのは2000年噴火だった。全島避難で東久留米市内の都営住宅へ入った酒井さんは、その明るい性格を活かして同じ団地に70人以上いた避難者と交流を深め、やがて団地内の「三宅会」の会長に就任した。そんな折、酒井さんは都内で島民の集いが開かれることを知る。団地の三宅会代

表として、参加を希望する人たちを引き連れて会に赴いた酒井さんは、ここで佐藤さんと再会を果たした。

全島避難が解除されることになったときに、会長から「島に帰れない島民を支援するために活動を起こしたい。協力してくれないか」と誘われた酒井さん。それから14年にわたって副会長を務めてきた。

### 「皆勤賞が取り柄」

「どんな活動をしてきたか」という質問には、「何もしていません」と遠慮がちに手を振る酒井さん。「他の皆さんがやってくれているので、本当に何もしていません」と顔をほころばせる。それでも東京都庁での記者会見、神戸での阪神淡路大

### 暮らしは変わるけれど

酒井さんは、避難中に結婚したこともあり、全島避難解除後には帰島しないことを決めた。現在は自治会長として地域の活動を支えている。「新報を同じ団地に住む三宅出身者のところへ届けていたが、ほとんどの方が亡くなってしまった」と語る酒井さん。新報を通じて知る島の様子も変わり、東京での暮らしも変わりつつある。

「ふるさとネットの活動に参加して多くの人と出会うことができた」と話す酒井さんは、これまでを振り返って、「島の生活もふるさとネットの活動も、ずっと思い出として残っていく」と笑みを浮かべていた。

## 14年間の編集後記

## 「絆」結べたことに心より感謝を

DTPA顧問 山田貴久



未帰島民の訪問活動をするDTPAのメンバー（2006年）

## ご寄付者名

(令和元年10月1日～12月14日)

吉田信行様 吉島輝雄様 光  
安千久子様 佐藤就之様 板  
倉美紀子様

皆さまのご協力に深く感謝  
申し上げます。

「三宅島新報」の編集  
を行う一方  
卒業生が  
立ち上げま  
した。

**避難中の祖父母が来校**  
改めて紹介させていた  
だくと、DTPAは、向  
上高校新聞委員会のO  
B・OGがつくる紙面編  
集のお手伝いをするボラ  
ンティア団体で、「三宅  
島新報」のほかにも、東  
日本大震災の被災地の一  
つである岩手県宮古市田  
老地区で活動するNPO  
の広報紙の発行や知的障  
がいがある方の施設での

壁新聞づくりのお手伝い  
などをしてきました。  
この団体が発足のきつ  
かけは、「ふるさとネッ  
ト」の佐藤会長との出会  
いでした。向上高校新聞  
委員会が2000年噴火  
で全島避難していた三宅  
島と関係を持ったのは、  
02年に在校生の祖父母を  
学校にお招きして生徒と  
交流をする行事に、三宅  
島から避難をされていた  
祖父母の方が参加された  
ことがきっかけでし  
た。その後、避難先の公  
営住宅で取

**会長の言葉を聞いて**  
そのとき、05年2月の  
避難指示解除が決まっ  
ている中で、佐藤会長は「こ  
れで島民連絡会は解散す  
るが、高濃度地区が残る  
などの理由で帰ることが  
できない住民がいる。そ  
の私たちの支援をするた  
めにNPOを立ち上げ、  
島民同士を結ぶ広報紙を  
発行しようと思うが、紙  
面編集のノウハウがない  
ので手伝ってもらえない  
か」と取材をした生徒に  
話をされました。その話  
を聞いた生徒が、卒業生  
後、周囲のメンバーに  
声をかけ、DTPAを  
立ち上げまし  
た。

**多岐に渡った活動**  
DTPAの活動は新報  
の編集に留まらず、在京  
島民の訪問活動や三宅島  
以前に新聞委員会が取材  
をしていた阪神淡路大震  
災や東日本大震災被災地  
でネットのメンバーと  
もに活動をしたり、神楽  
坂商店街の「あおぞら市」  
での物産販売のお手伝い  
をしたりと多岐に渡りま  
した。

**機会があれば今後も**  
05年10月に行われたふ  
るさとネットの立ち上げ  
準備会で、三宅の支援を  
されていた方から、「こ  
のような支援は中途半端  
にすると、被災者に迷惑  
をかけるだけになる」と  
いう言葉をいただいたの  
を覚えています。その意  
味では、新報の休刊まで  
お手伝いを続けられたこ  
とに、安どしています。  
そして、活動を通じて多  
くの方と絆を結べたこと  
、その中で生徒や卒業生を  
育てていただいたことに  
心より感謝を申し上げます。  
また、機会があれば  
三宅のために協力をさせ  
ていただきます。

最後に、佐藤会長の良  
き伴侶としてDTPAの  
活動を後押ししてくださ  
り、昨年ご逝去された宗  
ノ子様のご冥福を心より  
祈り、この文章を締めさ  
せていただきます。